

二〇二五年度

大妻中野中学校

海外帰国生入学試験

十月十九日

問題用紙

(シンガポール会場)

國

語

受 験 番 号	
番	
	氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で九ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに受験番号と氏名を忘れずに記入してください。受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は四十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

## □ 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

### 科学的すぎる言語学?

現代の言語学には、いろんな考え方がある。

文献中心の伝統的な言語学は、言語を文化や文学を担うものとして研究する。文字によって記された資料を手がかりに、民族の精神文化を明らかにすることが究極の目標である。

フィールド調査を中心におこなう言語学は、調査の行き届かない個別の言語を調べて分析し、その構造を解明する。自分自身で調査することが最重要と考え、すでに辞書や文法書がある言語は研究対象にならないとまで言い切る研究者もいる。

心の在り方を探る言語学は、個別ではなく、あらゆる言語に通じる普遍的な文法を追究する。こちらはデータが命で、データさえあればその言語を知つていようがいまいが、研究するうえでは関係ないという。一定の法則ですべての言語現象を説明しようと、目下のところ複雑な理論を展開中である。

こういった分野にはそれぞれ多くの研究者が存在し、世界中で研究が続けられ、今日も多くの論文が発表されている。大学でおこなわれる言語学の授業も、こういった学問的な姿勢のどれかで語られる場合が多い。

多様であることは悪くないのだが、わたし自身はどうかといえば、実はどれにも当てはまらない。語学教師としてはじまり、すでに辞書も文法書もある複数の言語に取り組んできた者にとっては、既存の分野にやりたいことがなく、居場所の見つからない状態が長らく続いている。

①とくに「フィールドの言語学」や「心の言語学」は、わたしには科学的すぎて、ついていけない。

科学を否定するわけではない。反知性主義でもない。だが正確さだけを追究して複雑な表や数式を駆使し、理論武装して論争を挑むのがどうにも苦手なのである。それが人文科学だろうか。

言語を学んだり調べたりすることは喜びに満ち溢れ<sup>あふ</sup>ている。ところが喜びについてはどの言語学でも認められていない。どうして喜びを隠さなければならないのか。わたしには分からぬ。激しい論争を通して解釈の妥当性を高めることだけが、科学ではないはずだ。いっしょに楽しんだり、面白がつたり、あるいは行き詰ったときに救いの手を差し伸べてくれるような、そういう言語学を追い求めてみてもいいのではないか。

そんなわたしの方法は、ロマン主義だといわれる。

ロマン主義は本来、十八世紀末から十九世紀にかけてヨーロッパに興った文学や芸術上の理想である。合理主義ではなく、②感情や個性や自由を大切にする態度が、わたしの言語学にも共通するというのである。なるほど。

では、「浪漫主義言語学」というのを新たに作ってみたらどうか。古典を大切にしたいわたしから、「ロマン」よりも「浪漫」と漢字で表記するほうがふさわしい気がする。

そして浪漫主義言語学こそが「外国語の隠し味」なのかもしない。

### 複数の外国語を中心

わたしの考える浪漫主義言語学について、その条件を考えてみた。

まず外国語を学ぶこと。これは絶対に欠かせない。母語を無視するわけではないが、いろんな言語におけるさまざまな現象を知ったうえで、改めて母語に向かうから面白いのである。母語しか知らないのは、井の中の X にすぎない。

外国語を学ぶといつても、ただ構造を知っているだけではダメである。概説を部分的に読んだくらいで、言語が分かるはずがない。現代の言語学の論文では、例文にある個々の単語の下に、訳と文法の注解が付されている。これをグロスというのだが、最近はグロスさえあれば、あらゆる言語現象が理解できると錯覚している人がいる。個々の言語にきちんと向かわずに論文が読めるとは、わたしにはどうにも信じがたいのだが。

学ぶ外国語は一つでは足りない。いくつか学ぶ必要がある。たった一つの外国語を母語と対比させる二項対立は、これまでにさんざんやつてきたので、もう充分である。そもそも世界には言語が数多く存在するのだから、それを無視して二つに絞ってしまうと、現実が見えなくなる。すべてを学ぶことは不可能だけど、複数の外国語に触れながら、言語について考えていきたい。かつて「複数言語学」を提唱したこともある。

学ぶ外国語の数は多ければ多いほどよい。タイプの違う言語をあれこれ学ぶのもいいが、たとえ同系であっても侮ってはいけない。同じ語族で同じ語派、さらには同じ語群であっても、いろいろと違うものだ。たくさんの外国語を学びながら、個々の現象を大切にする。他の言語と安易に比べることは慎みたい。共通点よりも相違点に注目する。多様さこそが面白いのである。

たくさんの外国語のなかには、古典語も含まれている。ロマン主義は古典主義を排除するようだが、浪漫主義言語学は時代を超えて、あらゆる言語を大切にしていきたい。また方言も忘れてはならない。方言は個人にとってかけがえのないものだ。首都で話されていることばだけを「本場」と考えるような心の狭い態度は慎みながら、お互いの方言を尊重する。

以上を踏まえたうえで、浪漫主義言語学では言語は完全に説明し尽くすことが不可能であることを自覚していきたい。言語は時々刻々と変化する運命にある。捕まえたと思った途端にスルリと逃げてしまう。だから気長に、しかも謙虚につき合うしかない。

こんなことをいついては、研究論文は書けない。しかし浪漫主義言語学は研究のために存在するのではない。外国語を学びながら母語について改めて考える人に、ほんのすこしのポイントを提供していく。あとはそれぞれが諸言語に対して柔軟に向き合っていけば、それでいいのである。

### ③研究だけが言語学の役割ではないはずだ。

#### 不必要なものと必要なもの

浪漫主義言語学の研究を志して、大学院に進もうとしても無駄である。大学院では「フイールドの言語学」か「心の言語学」が中心だし、わたしは大学院では教えていない。そもそもそんな分野は認められていない。認められなくても構わない。浪漫主義言語学はそんなに大袈裟なものではなく、隠し味なのである。外国語を学ぶためのスペースにすぎない。基

本を身につけたら、あとはどんどん具体的な外国語を学ぶほうがいい。

浪漫主義言語学に馴染まないものがいくつもある。

まず検定試験はいらない。検定試験は外国語学習のペースメーカーのように④重宝がられているようだが、使い方を間違えると危険である。はじめは外国語能力を満遍なく伸ばすつもりでいたのに、いつの間にかスコアを上げることだけに⑤心血を注いでしまう。ハイスクアを叩き出した者は安心して勉強しなくなるし、点数の低い者はスコアを上げることだけを目指して試験を受け続け、本当の勉強がやはり疎かになる。

外国語能力は本人が把握していればいいのであって、他人に誇示する必要はない。なまじスコアがあると、人は競争してしまう。競争は浪漫主義言語学が目指すものではない。外国語学習で文法や語彙を身につけながら、ことばの背景を学んだり、本を読んで知識を増やしたりするときに、競争はかえつて邪魔である。

留学も不要である。ことばを学ぶためには現地での経験が不可欠と考えている人は、古典語を完全に無視している。あるいはメジャー言語しか頭にないから、⑥どんな国でもお金さえあれば出かけて勉強できるものと信じ込んでいる。だが世界には留学どころか、外国人が立ち入ることさえ難しい国や、天災や戦乱で生活そのものが大変な地域だつてあるのだ。

それ以前に、外国語は現地に行かなくても学べる。長い時間をかけば、自宅で勉強しても相当な効果が上げられる。外国語学習は何年もかけなければ上達しない。お金を注ぎ込んで留学したところで、たいして時間の短縮にはならない。一年の滞在で身につくのはやつぱり一年分の知識である。しかも言語は変化する。一、二年かけて集中的に学んだところで、その先ずっと使えるわけではない。勉強を続けなければ、留学中に学んだ外国語なんてすぐに古くなる。

それでも言語の習得のために留学したいというのなら、高校時代に行くといい。教え子たちの中で留学の効果が感じられるのは、卒業が遅れるにもかかわらず高校時代に果敢に現地体験を果たした者たちに限られる。大学では留学に振り回されずに、じっくりと腰を据えて勉強ができる。大学生が海外で学びたければ、一、二ヶ月の語学研修で充分である。いちばんいけないのが仕事を辞めて留学することで、わたしはくり返し諫めているが、残念ながら聞いてもらえない。

現地に行きたければ旅行をすればいい。自分の目指す国に何度も足を運ぶのは大切なことである。その場合、まとめて一年滞在するよりも、二、三年に一度くらい定期的に通うほうが、浪漫主義言語学にふさわしい教養が身につけられる。そのためには、ふだんから現地の情報にアンテナを張ることも必要だ。その積み重ねが外国語の理解を深める。

さらに浪漫主義言語学では、もっと本を読んでほしい。

### 本を読む、話を聞く

わたしが考える浪漫主義言語学は、読むことが中心である。外国語学習者の多くは会話を目指すが、見知らぬ人に道を教えて、おかげで感謝されて嬉しいなんていってるのは、早く卒業してほしい。よい友だちと巡り合って深く話しあうことも大切だが、そうなると焦点は徐々に言語から関係へと移る。気心が知れるようになれば、よほど意識しないかぎり、言語から自然と遠ざかってしまう。

だが読書は言語から永遠に離れない。古典から現代までさまざまな書物に広く触ることは、外国語学習の究極である。時間をかけてさまざまにテキストを読むことを通して、ゆっくりと理解を深めていけばいい。

その際、ことばを切り刻んではいけない。言語学のなかには、文脈を無視した都合のいい例文ばかりをコーパス（コンピュータによる言語資料）から集めたり、分析のために非現実的な文を勝手に作ったりしている分野もあるが、教科書や文法書など教育目的ならともかく、そんなことをして

も理解は深まらない。⑦ことばは文脈の中で生きている。浪漫主義言語学の対象は生きていることばである。ちゃんとした文脈の中では、古典語だけて生きている。

とくに文学や小説などフィクションを読んでもほしい。役に立つ情報からしばし離れ、言語文化の奥行きを感じることが、外国語学習には欠かせない。検定試験では得られない喜びがここにある。

ドキュメンタリーも悪くはない。ただし、どんな内容でも書かれたものにはすべてフィクションの要素があることを忘れないでほしい。人が語ることが完全に客観的であることはありえない。真実はいつも一つではないのである。

わたしが興味を持つっているのがライフィストリーだ。

ライフィストリーは社会学の方法である。はじめて触れたのは、赤嶺淳『クジラを食べていただこう――聞き書き 高度経済成長期の食と暮らし』(新泉社)だった。書店の棚で偶然に見つけたのだが、これがすこぶる面白い。

この本は名古屋市立大学人文社会学部の授業の課題から生まれたという。大学二年生から四年生までの学生が、主として自分の祖父母に話を聴いてまとめたものである。テーマは高度経済成長期の変化の諸相を「食」の観点から切り取ることで、わたしのように給食でクジラの竜田揚げを食べた世代には、それだけでも充分に興味深い。だが読み進めていくうちに、まったく別のことに気づいた。

このようないい聞き書きもまた、生きたことばではないか。

聞き書きをまとめた学生は、誰もが懸命にことばを書き留めている。はじめて聞き書きに挑戦した者も少なくないというが、だからこそ愚直なままでに忠実に書き留めようと心がけ、おかげで地域方言を交えながら語る老人たちのことばが生き生きと伝わってくる。

言語そのものが目的でないからこそ、ことばが見事に再現されるのかもしれない。

言語調査は研究が目的なので、下手をすると不自然だつたり文脈がなかつたりする文が被験者に提示されてしまう。「これはいうか、それともいわないか」と選択を迫られ続けば、聞かれたほうもいい加減ウンザリしてくる。それでよい結果が出るのか。

そもそも言語調査は繊細なものである。ある単語を調べるためには、そのものズバリをいうのではなく、条件を設定して相手から引き出さなければならぬ。「モノモライのことをあなたの地方では何といいますか」のような誘導尋問はダメだ。だからといって麦粒腫なんていう専門用語を使つても、一般には理解できない。「――Z――」のように、上手に聞き出すことが大切である。言語に対する意識調査でもそうで、「あなたにとつて◎◎語とは何ですか」などと直球の質問をしても、何かが得られるわけがない。

どんなに上手に聞き出せたところで、調査はあくまで調査である。被験者はことばを求められていることを意識せざるをえない。それより別の調査として話を聞きながら、そのことばが調べられたら、それがいちばんいいのではないか。そんな夢想が広がった。

浪漫主義言語学は研究が目的ではないので、言語調査は関係ない。それでも人の話に耳を傾けることは大切にしたい。会話重視の外国語学習は、自分のいいたいことばかりを投げかけて、相手の話を聴いていない。それでは「会話のキヤツチボール」ではなくて「会話のバッティングセンター」である。

話を聴くことと本を読むことは基本的に変わらない。相手が伝えたい内容を、静かに正確に受け止めるために努力する。それは相手を尊重することにも繋がる。

⑧発信ばかりしたがる空虚な外国語会話の対極にあるのが、浪漫主義言語学なのである。

(黒田龍之介『外国語を学ぶための言語学の考え方』中公新書による)

問一. — 部① 「とくに『フィールドの言語学』や『心の言語学』は、わたしには科学的すぎて、ついていけない。」とありますが、なぜですか。

次のア～エの中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア. 正確さだけを追究し、理論武装のもと論争を通して解釈の妥当性だけを高めることだけが、科学だとは思わないから。  
イ. 多様な言語学の存在を無視し、自分たちの研究方法や考え方だけを妥当だとする研究者たちの姿勢に共感できないから。  
ウ. 十八世紀末から十九世紀にかけてヨーロッパに興った浪漫主義の考え方こそが、唯一の科学的方法だと考えるから。  
エ. 世界中で多くの研究者によって研究が続けられ、多くの論文が発表されているからといって、科学だとは思わないから。

問二. — 部② 「感情や個性や自由を大切にする態度」とありますか。これについて具体的に述べている部分を本文中から四十五字以内で探し、初めの四字と終わりの四字をそれぞれそのまま抜き出しなさい。

問三. □X を補うのにふさわしい語を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 蛍 イ. 蝶 ウ. 蛙 エ. 蛇 オ. 姬

問四. — 部③ 「研究だけが言語学の役割ではないはずだ。」とありますが、筆者が本文で紹介している言語学の役割として最もふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 民族の精神文化の究明 イ. 個別言語の構造の解明 ウ. 普遍的な文法の追究 エ. 科学的な言語の確立の追求

問五. — 部④ 「重宝がられている」⑤ 「心血を注いでしまう」の意味として最もふさわしいものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア. 便利でよく使われている。  
④ イ. 優先して使われている。  
ウ. 間違いなく使われている。  
エ. よく考えて使われている。

ア. 義務だと思い込み没頭してしまう。  
⑤ イ. 体調を崩してまで無理してしまう。  
ウ. 全力を尽くして努力してしまう。  
エ. 心身ともにあやつられてしまう。

問六. — 部⑥「どんな国でもお金さえあれば出かけて勉強できるものと信じ込んでいる。」とありますが、なぜですか。次のア～エの理由の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア. 現地に行つて学ぶことの困難な言語の存在を考えてないから。
- イ. 現地に行つて検定試験のハイスコアを目指すとは限らないから。
- ウ. 現地に行つても言語の変化する速さに変わりはないから。
- エ. 現地に行つても身につく外国語の数には限りがあるから。

問七. Y を補うのにふさわしい漢字二字を答えなさい。

問八. — 部⑦「ことばは文脈の中で生きている。」とありますが、この一文は、「ことばは、その言葉を使う人や場面、その言葉を使うねらいなどをによってその意味が決まってくる。」と言い換えられます。この言い換えを踏まえて、次の一文がどのような文脈の中で発せられたことばかを自分で考えて説明しなさい。

「わたしはサンドイッチ。」

問九. 「Z」には「モノモライのことは何というか」を聞き出すための質問が入ります。上手な聞き出し方を自分で考えて  
答えなさい。

問十. — 部⑧「発信ばかりしたがる空虚な外国語会話」とありますが、どういうことですか。次のア～エの説明の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア. 自分のいいたいことばかりを相手に伝えるものの、正確に相手に伝わっていない外国語による会話。
- イ. 自分のいいたいことばかりを相手に伝えて、相手に正確に伝わったと思い込んでいる外国語による会話。
- ウ. 自分のいいたいことばかりを相手に伝えて、相手の話を正確に受け止めようとしない外国語による会話。
- エ. 自分のいいたいことばかりを相手に伝えるのではなく、相手のいいたいことを受け止める外国語による会話。

**〔二〕次の各問に答えなさい。**

**A 漢字に関する問題**

問一 次の①～⑩の――部について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 伸縮自在のハンモックでの昼寝は最高だ。
- ② 私の兄は新宿駅をケイユして大学へ向かう。
- ③ そろそろ漬物のシオカゲンを見る時期ですね。
- ④ 夏草が繁茂する、いにしえの古墳。
- ⑤ 美術の時間に、友人の似顔絵を描いた。
- ⑥ 姉の明るい前途を願つて、祝杯をあげる。
- ⑦ クラスでの話し合いの後に、サイケツをとろう。
- ⑧ ゼンイによる募金のご協力を、よろしくお願ひいたします。
- ⑨ 貧しい人とトむ人との差がない、平和な世界の創造を願う。
- ⑩ お歳暮として贈る品物を決める。

問二 漢字の読み方には、「音読み」「訓読み」とがあります。この二つの読み方を組み合わせて、（　）内のヒントを参考に読み方を考え、ひらがなで答えなさい。

- ① 「父父」（原料は大豆です）
- ② 「子子」（土俵の上で踏みます）
- ③ 「身身」（雑巾をぬうときに使います）
- ④ 「人人」（野菜です）
- ⑤ 「様様」（ふらふらとあちこち…）

**B ことわざ・慣用句に関する問題**

問三 次の【】の中にそれぞれ対になる漢字を、解答欄に合わせて答えなさい。

- ① 【】り言葉に【】い言葉  
② 【】さ【】さも彼岸まで  
③ 【】きを助け【】きを挫く  
④ 【】は【】をかねる  
⑤ 【】を【】への大騒ぎ

**C 文法・言葉使いに関する問題**

問四 次の①～⑤の文章を（　）内の指示にしたがって書き直すと、どのようになりますか。適語を考えて入れなさい。

- ① ねずみは猫が追いかけたので逃げた。（「～される」という意味の文にしなさい）  
ねずみは猫に【】ので逃げた。
- ② 来月は日本にいますか。（尊敬の表現にしなさい）  
来月は日本に【】ますか。
- ③ 彼は問題を解決するだろう。（打ち消しの意味の「ない」を使って意味を強めなさい）  
どうして彼は問題を【】あろうか。
- ④ 父の言いつけて、妹が食事を作った。（「～させる」の意味の文にしなさい）  
父が妹に食事を【】た。
- ⑤ 先生から漢字テスト合格のシールをもらう。（へりくだつた表現にしなさい）  
先生から漢字テスト合格のシールを【】。